

見つめあう双子

以前にも、どこかで書いたことがあるのですが、昔、母が子どもの頃の写真を分けてくれました。アルバムに入れてあったものを抜き取って、平等にと分けてくれました。60年以上も前の写真もありましたから、白黒のレトロ写真も多く含まれていました。ビニールの袋に、まるで袋菓子のように詰め込まれていて、いかにも母からだなあと感じたことを覚えています。

あっ、と声をあげた僕は、早速、乳幼児・少年時代の自分の姿を求めて、次々と写真を手にしたのですが、どれが自分でどれが相棒かすぐには分かりません。一旦はこっちの方が自分だと思っても、次の瞬間には逆のような気がします。では、そちらの方かなと思っても、やっぱり自信がありません。「あれ〜」と戸惑いながら、目を凝らして、もう一度よく検討します。そして、まず相棒の姿をしっかり確認してから、だったらこっちが僕だと判断したのです。一枚だけではありません。どの写真もどの写真も、僕はまず相棒の顔を同定してから、「真がこっちだから、僕はこっちだ」と決めていきました。

そうです。僕はこのように相棒の顔を見つめて、成長していったのです。高校を卒業するまで、反発することもありましたが、僕たちは毎日、まるで鏡を見るように、おたがいの顔を見つめあって育ってきたわけです。今は、直線距離にして約600km離れた場所で、それぞれの家庭生活を営みながら、精神的には、なおもおたがいに見つめあって生きていると、少なくとも僕は思っています。

僕たちは、1950年代にカツオ漁で有名な南国の小都市で、一卵性の双生児として生まれました。父母は、新約聖書のヨハネによる福音書の「恵みと真に満ちていた」という箇所をちなんで、先に生まれた僕を「恵」、後から生まれた相棒を「真」と名付けました。当時は、先に生まれたA児を「弟」、後から生まれたB児を「兄」とする向きが支配的だったのですが、父母は、どういうわけだか僕を第一子、真を第二子と決めました。残念ながら、日本の国内法では、双子の場合も「長男」であるとか「次男」であるとか決定して、登録しなくてはなりません。しかし、僕たちの父母は、まだまだ古い性差観や家族関係が残っていた時代としては、実に分けへだてなく育ててくれました。どう記憶を探っても、父母から「お兄ちゃんだから」とか「弟だから」という言い様をされた覚えはありません。この点に関しては、今でもとても感謝しています。